

新・下野市風土記

新しい展示とうれしい誤算



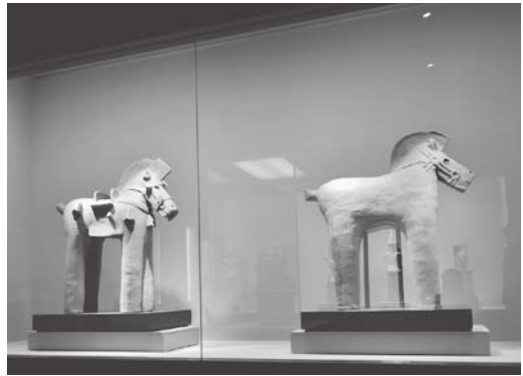
下野市教育委員会 文化財課

5月2日にしもつけ風土記の丘資料館がリニューアルオープンし、入館者は最初の5日間で1,000人を超えました。ご高齢の方から保護者に手を引かれた未就学児のお子さんまで、様々な年齢層の方々においでいただいています。

来館者の方々は、まずイントロダクションの8分の映像に食い入るように見入ってください、次に、新しい展示室に入って「ああ！」と驚嘆の声をあげてください。

320点に及ぶ展示品の中で、その声はどこで発せられているのか、来館者を観察してみたところ、我々が展示の構成段階で「特にご覧いただきたいポイント」としてご用意させていただいたのとは違う、想定外の「驚嘆ポイント」がいくつかあることが判明しました。

今回はそのひとつである「馬形埴輪」をご紹介します。



馬形埴輪の来歴

現在、資料館に展示しているのは、甲塚古墳から出土し、平成29年度に重要文化財に指定された馬形埴輪4体のうち2体の資料です。

馬形埴輪は、出土したとき、墳丘の裾に4頭一列で、頭を石室側（東）に向けて並んでいました。現在、展示してあるものは、先頭と3番目のものです。

一口に馬形埴輪と言っても、4頭とも装備が異なっています。先頭と2番目は、鞍のほか、馬鐸や鈴など、様々な飾りを付けていますが、3番目と4番目は鞍や飾りのない、いわゆる裸馬となっています。

石室が盗掘されていた甲塚古墳からは出土しませんでした。市内の他の古墳（御鷲山古墳、下石橋愛宕塚古墳、石橋屋宮神社古墳など）からは、金箔の張られた馬具や青銅製の馬鐸が出土しています。特に、下石橋愛宕塚古墳から出土した馬具は、県内でこれまで出土した金銅製品の中でも最良と断言できる輝きを放っています。金の純度が高い名品だったのかもしれない。

迫力のある展示の秘密

見学者の方々がこの馬形埴輪を見て感嘆するのは、馬たちが非常に大きく（体高が高く）、脚が長く見えるからではないかと推察します。

展示ケースに施された様々な工夫も、この迫力に一役買っていると思われます。

馬形埴輪は頭が重く、古墳に並んでいた当時も、脚を下から10~15cmくらい墳丘に埋め込んでいたので、その分、脚が長く作られています。

展示では、そのままでは頭部の重みで前のめりに倒れてしまうため、腹部で支える台座に載っています。さらに、この台座の下に免振装置が付いた台があるため、よほど長身の方でない限り、馬形埴輪をやや見上げるような高さになっています。

ケース内のLED照明も、光の当て方を工夫し、周囲の展示とは変えているため、見学者の方々がより強いインパクトを感じ、我々にとってはうれしい誤算である驚嘆ポイントとなっているのではないのでしょうか。

古墳時代の馬事情

古墳時代の人々が本物の馬を見たときは、資料館の見学者の方々が馬形埴輪を見てあげた以上の、感嘆の声をあげたことでしょう。

何故なら、3世紀頃（縄文～弥生時代）の日本（倭）には、馬はいなかったのです。『魏志倭人伝』に、当時の日本には「牛、馬、虎、豹、羊、鵠」がいなかったと記録されています。これを裏付けるように、弥生時代の中頃までの本州の遺跡からは、馬や牛の骨は発見されていません。

一方、朝鮮半島では3世紀中頃から馬が利用されていました。日本列島に5世紀頃まで馬の飼育技術が伝わらなかったのは、半島側が技術の流出を拒んだからだという説もあります。というのも、古代オリエントやヨーロッパで馬に戦車を引かせたり、騎兵が活躍したりしていたように、古代世界において馬は軍事力の根幹だったのです。

現代のスパイ映画に登場する軍事機密のように、当時は馬の飼育技術が機密事項だったのかもしれない。